

第二項 大正初頭以降時代

大正初頭前後ニ於ケル世界海軍國ニ於ケル兵器進歩ノ狀況ヲ見ルニ我海軍ニ於テハ到底現状ニ甘ンズベキニアラザルニ鑑ミ大正三年二月伊集院海軍々令部長ハ齊藤海軍大臣ニ商議スルニ機械水雷(甲種、乙種)ノ改良調査ニ關スル件ヲ以テセシカバ海軍大臣ハ同年八月十五日ヲ以テ海軍少將中野直枝ヲ委員長トスル敷設水雷改良調査委員會ヲ設ケ敷設水雷及甲乙種機械水雷ニ關スル改良調査ヲ爲サシメ次テ事務局ノ急變ト共ニ之ガ訓練ニ關シ左記訓令ヲ發スルニ至レリ

乙種機械雷使用ニ關スル件(關係長官並ニ廠長)

乙種機械雷取扱方ニ關シテハ明治四十五年官房機密第一六五號ノニテ以テ之ガ使用制限ニ就キ内訓致置候處時局ノ急變ニ際シ本器ノ使用上遺憾無カラシムル爲此際第一(第二)艦隊附屬水雷戰隊ニ別表ノ通本器同附屬兵器及同落下臺ヲ供給可致ニ付左記要領ニ依リ

之ガ訓練及實驗ヲナサシムベシ

但所要兵器ハ海軍艦政本部長ヲシテ供給セシム

右訓令ス

(左記) 要 領

- 一、水雷ノ取扱及敷設法ニ習熟スルト同時ニ構造上ニ於テモ充分ナル攻究ヲ爲シ必要ナル事項ハ其ノ都度之ヲ報告スルコト
- 二、搭載水雷及敷設ニ關スル諸裝置ハ隱蔽シ且敷設訓練ハ船舶ノ交通頻繁ナル海面ニ於テ行ハズ又本器ヲ亡失セザル等軍機ノ保護ニ關シテハ充分ノ注意ヲ要ス
- 三、敷設訓練ニ關シテハ特ニ必要ナル場合ノ外水雷艦ニハ機部ヲ装着セス底蓋ノ代リニ擬製裝藥口蓋ヲ用フルコト
- 四、觸衝ノ實驗ヲ爲ス場合ノ外可成斷離器ヲ使用セザルコト
- 五、滑走臺ハ訓練上特ニ必要ナル場合ノ外適宜索等ニテ結着シ之ヲ流失セシメザル方法ヲ取ルコト

別 表

三等驅逐艦	一艦ニ付乙種機雷及滑走臺各四個	落下臺一	同型一
二等驅逐艦	同	八個	同

(終)

之ヨリ先キ驅逐艦山風海風ノ竣工ト共ニ同驅逐艦ヲ以テナル高速力敷設ニ關スル訓練實驗(二十八節乃至三十節)ヲ行ヘシガ艦隊ニ於テモ積極的ニ本訓練研究ニカムル所アリ大正三年末ヨリ翌大正四年ニ亘リ第一第二艦隊ニ於テ訓練研究項目ヲ左ノ如ク指示實行セリ

大正四年第一、二艦隊ニ於ケル一號機雷訓練研究項目

一、襲撃運動法

二、襲撃ニ對スル防禦法竝ニ回避運動法

三、驅逐艦ニ於ケル最大準備搭載數

四、晝間一號機雷敷設線ヲ軍艦上ヨリ視認シ得ル距離

五、荒天航行ノ場合ニ於テ準備搭載中ノ一號機雷保安ノ狀態竝ニ同敷設時ノ水雷落下狀態

六、荒天及高速力航行ノ場合ニ於テ準備搭載中ニ在ル一號機雷機構部變調ノ有無

七、高速力敷設ニ堪フル限度

八、現裝置ノ落下裝置ハ實用ニ適スルヤ否ヤ

九、「クリツパー」型艦首ヲ有スル軍艦ニ對シ一號機雷拘束ノ能否

一〇、艦首ニ拘束セル場合左記諸項ノ檢測

(イ) 拘束後觸衝迄ノ間ニ水雷跳出ノ有無及舷側觸衝迄ノ間ニ早發ノ虞ナキヤ

(ロ) 斷離器作働ノ良否

二、其ノ他必要ト認ムル事項

而シテ直接實行ニ當リシ第一、第二水雷戰隊ニ於テハ右指定項目ノ外更ニ左記ノ細目ヲ定メ訓練實驗ニ當レリ

第一、第二水雷戰隊ノ一號機雷訓練研究細目

(前記第一、二艦隊ノ同項目ト同一ノモノハ之ヲ略ス)

一、機雷(一號機雷ヲ云フ以下同ジ)ノ取扱及敷設法ニ對スル基本訓練

二、各艦機雷搭載數ノ適度如何

三、現用落下雷ニ對シ荒天若クハ高速力航行其ノ他實用上實驗シ得タル具體的所見
四、高速轉舵中ノ敷設ニモ耐ヘ得ルヤ

落下雷及機雷ノ兩方面ヨリ觀察スルヲ要ス(從來速力ニ對シテハ約二十五節迄實驗シ好結果ヲ得タリ)

五、敷設後其ノ敷設線ハ風潮ノ爲如何ナル影響ヲ受クルヤ

六、機雷使用ノ爲ニ他兵器ノ使用ヲ妨グルコトナキヤ有ラバ其ノ程度如何

七、機雷使用ノ爲ニ特ニ人員ヲ増加スル必要アルヤ有ラバ其ノ員數如何

八、晝夜間一個驅逐隊ヲ以テスル敷設隊形、運動法及通信法

九、機雷ノ機構上改良スベキ諸點

一〇、機雷浮標及浮標索等ノ塗色ニ關シ改良スベキモノノ有無

一一、現用ノモノハ訓練實施上ニ於テ困難アルガ如シ之ガ改善案ヲ求ム

一二、驅逐艦ニテ敷設線ヲ排除掃海スル方法

一三、驅逐艦々首ニテ敷設線ヲ拘束セシトキノ狀況

一四、投下敷設作業竝ニ敷設線ヲ驅逐艦ヨリ認識シ得ル最大距離

一五、驅逐艦々首ニ拘束セル場合左記ノ檢測

(一) 拘捉後機雷早發ノ有無
(二) 斷離器作働ノ良否

本實驗訓練ハ從來ノ未解決機構問題ニ幾多ノ改善資料ヲ提供スルト共ニ用兵者及艦政當事者ニ與ヘシ
參考資料尠ナカラザリキ但之等ハ孰レモ構型及同以前ノ驅逐艦竝ニ一號機雷甲ニ對スルモノタルニ注
意ヲ要ス

大正六年六月自今驅逐艦用一號機雷及落下臺ハ教育訓練上必要ノ場合ニ限り司令長官ノ要求ニ依リ左表(略)ノ通供給スル旨發令アリ蓋シ當面ノ實驗訓練ノ目的一段落ヲ告ゲシト機密保持及保存上ノ目的ニ出デシモノナリ

大正七年七月徳山灣外ニ於テ飛行機ヨリスル一號機雷透視實驗ヲ行フ成果等別紙第一ノ如シ
大正十年六月海軍教育本部ハ實施部隊ニ對シ左記研究項目ニ對スル意見ヲ求メタリ

- 一、戰場ニ於ケル對勢ノ變化竝ニ洋心ニ於ケル敷設線ノ變態(風曲、縮小)ニ鑑ミ現用隔時器ノ調整時間ニ對スル要求度
- 二、繫維索ノ適長度
- 三、斷離浮流ノ單一機雷ガ奏効上艦首波ヨリ受ケル影響
- 四、編隊敷設ニ於ケル通信法
- 五、一號機雷ノ使用ニ關シ現驅逐艦定員ニ對スル要望

右ニ對スル各部ノ意見別紙第二ノ如シ

大正十年九月一號機雷乙ノ完成ト相前後シ巡洋艦ニ於テモ平素之ガ訓練ヲ行フノ必要ヲ認メ前記驅逐艦ニ對スルモノト一併シ新ニ左ノ通令達セリ

大正十一年六月二十七日

海軍大臣

各鎮守府司令長官宛

一號機雷及同落下臺ニ關スル件

第一、第二、第三艦隊編入中ノ巡洋艦機雷敷設裝置
ヲ有スルモノ及各驅逐艦ニ對シ自今教育訓練上必要ノ場合ニ限り當該艦隊司令長官ノ要求ニ

依リ左表ノ通一號機雷及同落下雷臨時供給方取計フベシ

右訓令ス

品名	區分	巡洋艦	一、二等驅逐艦 (一隻ニ付)	三等驅逐艦 (一隻ニ付)	記事
一號機雷		一六個	八個	四個	但附屬品ハ兵器簿ニヨリ導火藥罐用炸藥及下瀬六稜火藥ハ擬製トス
同落下雷、覆共		／	／	一個	
同擬製炸藥口蓋		一六個	八個	四個	

(備考) 本件ハ亦同時ニ各艦隊司令長官ニ通達セリ

右ニ依リ各艦隊戰隊等ニ於テハ夫々訓練計畫ヲ定メシガ左記ハ之ガ一例ナリ

大正十一年第一艦隊一號機雷ニ關スル訓練作業豫定摘要

一號機雷ニ關スル訓練作業ノ要領

一、落下雷員ノ講習(略)

二、基本裝備訓練(略)

三、基本教練敷設(略)

四、應用教練敷設

(一) 主ナル研究事項

(1) 編隊敷設、之ニ關スル隊内通信法

(2) 輕巡洋艦、驅逐艦ニ於テ一號機雷ノ取扱ニ關シ現定員ノ適否

(3) 敷設線ノ縮小度及風潮トノ關係

- (二) 敷設法、通信法等ニ關シ教範草案ノ適否
 - (三) 戰術の見地及敷設線ノ變態ニ鑑ミ現用隔時器ノ調整時間ニ對スル要求度如何
 - (四) 飛行機ヨリスル一號機雷ノ敷設原及敷設作業ノ視認距離如何
- (三) 實施部隊

(イ) 第三戰隊、飛行機一

(ロ) 第一水雷戰隊(一、二番隊缺)、飛行機一

(三) 實施上準據スベキ要領

(イ) 裝備及敷設機雷ニ關スル事項ハ前號ニ同ジ(毎同各隊各艦八個宛)

(ロ) 敷設速力 二十節以上適宜

(イ) 敷設法 第三戰隊 一字運動單梯陣逐次敷設

第一水雷戰隊 人字運動單縱陣逐次敷設

敷設終了セバ各隊(艦)ハ各自隊ノ敷設線方向、直距離形狀(水雷戰隊ニ在リテハ兩敷設線ノ關聯セル形狀ヲモ)其ノ他流潮、風向、風力等ヲ大約十分間毎ニ測定シ一時間ヲ經過セバ揚收解放、檢査ヲ行ヒ、發火ノ能否其ノ他内機ノ狀態ヲ檢査スルモノトス

大正十二年末第一艦隊司令長官意見要領次ノ如シ蓋シ當時ニ於ケル訓練上ノ要求ヲ語ルモノニシテ其ノ新兵器ヲ供給シ得ザルハ製造力ノ不足ニ基クモノナリ

現用一號機雷敷設教範草案ハ主トシテ一號機雷甲ヲ以テスル三等驅逐艦ノ實驗ヲ基礎トセルモノナリ故ニ形體速力共ニ増大セル一、二等驅逐艦ハ勿論本兵器ヲ搭載セル輕巡洋艦ニ對シ妥當ナラザル條項少シトセズ而シテ運動ノミニ止ル敷設教練所見ハ正鵠ヲ缺ケルモノ多ク其ノ價值尠少ナリ且大正十年九月新ニ制定ノ威力形體共ニ増大セル一號機雷乙ニ對シ未ダ新銳艦艇ニ依ル編隊敷設

實驗ノ施行セラザルハ大ニ遺憾トスル所ナリ速ニ新製品ヲ艦隊ニ供給シ敷設術ノ研究ヲ行ハシメラルルノ必要大ナルモノアリト認ム

之ヨリ先キ各實施部隊ニ於テハ最近發布セラレタル敷設教範草案、操式草案等ニ準據シ編隊高速敷設法、敷設指揮法、艦上及機上ヨリスル視認距離實驗等ニ努力スル所アリ大正七、八、九年ノ交一時沈滞セル斯術訓練氣分ヲ覺醒スルモノアリリシモ之ガ兵術的用法ノ演練ニ至リテハ徹底スルニ至ラズ大正十三年七月第二艦隊司令長官意見中ノ左記ハ之ガ企望ノ一端ヲ示スモノナリ

一號機雷ノ兵術的用法ニ至ツテハ將來大ニ研究ヲ要スベキモノニシテ今回ノ實驗ニ於テハ訓練ノ目的上之ヲ究明スルコトヲ得ザリシト雖主力艦隊制限ノ結果極度ニ奇兵ノ利用ヲ必要トスル現状ニ於テハ之ガ使用ニ關シ研究ノ要大ナルモノアリ之ガ取扱法、敷設法及運動法ニ於テモ訓練ノ餘地亦大ニシテ努力ヲ要スルモノアリト認ム

右第二艦隊司令長官意見ニ先チ大正十三年一月十五日海軍々令部次長ハ海軍次官ニ商議スルニ一號機雷ノ兵術の大規模實驗ヲ行ヒ主トシテ左記ノ研究ヲ爲サンコトヲ以テセリ

一號機雷ノ晝夜間ニ於ケル戰術的用法

魚雷機雷併用戰法

一號機雷ノ機構的竝兵術的價值

同年二月十九日海軍次官ヨリ海軍々令部長宛承諾ノ旨ヲ通報セシニ依リ關係官廳部隊等ニテハ之ガ實施ニ關シ準備スル所アリ例令バ同年二月上旬横須賀海軍工廠ヲシテ一號機雷ガ艦側ニテ發火ノ場合確

ハ破壊スルモ艦體ニ毀害ヲ及ボサザル最小藥量ノ決定實驗ヲ爲サシメタル如キ其ノ一ナリ斯クテ本實驗ニ於テ機雷ノ衝撃發火ノ感知ヲ容易ナラシメ加フルニ夜間之ガ認知ヲ一層明確ナラシムル目的ヲ以テ機雷罐内ニイ)演習炸藥ノ裝填(ロ)特製發光器ノ裝着ヲ行ヒ得ル如クシ同年七月十六日ヲ以テ左記令達ヲ見タリ

大正十三年七月十六日

海軍大臣

聯合艦隊司令長官宛

一號機雷實驗ニ關スル件

本教育年度内適當ノ時期ニ於テ左記ニヨリ一號機雷ノ實驗ヲ施行シ意見ト共ニ其ノ成績ヲ報告スベシ

記

一、研究項目

- (イ) 晝夜間ニ於ケル一號機雷ノ戰術的用法
- (ロ) 魚雷機雷併用戰法並ニ其ノ實施
- (ハ) 一號機雷ノ機構的並ニ兵術的價值

二、使用兵器

- 本實驗ノ爲左ノ通一號機雷(甲)ヲ供給ス
 - 第三戰隊(夕張缺)第五戰隊各艦 四十八個
 - 第二水雷戰隊第一、第二驅逐隊各艦 十六個
 - 第一水雷戰隊第十四、第十五驅逐隊各艦 八個

(備考)

機雷ノ衝擊及作働ヲ確知スル爲夜間使用ノモノニ對シテハ機雷罐ヲ破壊スルモ船體ニ毀害ヲ及ボサザル程度ノ藥量ヲ裝
備ス

三、實驗方法

- (イ) 本實驗ハ努メテ實戰的ニ行フコト
- (ロ) 實驗ハ夜間ヨリ晝間ニ引續キ行フコト
- (ハ) 大凡機雷ハ約半數宛晝夜間ニ區分シ使用スルコト
- (ニ) 機雷ノ衝擊ヲ確認スル方法ヲ講ズルコト

右ニ依リ聯合艦隊司令長官鈴木貫太郎ハ聯合艦隊一號機雷實驗要領ヲ定メ九月中旬ヲ以テ之ガ實施ヲ豫定セリ然ルニ實施豫定當日タル九月十五日ハ猛烈ナル荒天(紀州沖ヨリ九州東岸ニ亘ル)ニ會シ實施不能ニ陥リ遂ニ之ヲ取止ムルノ止ムナキニ至レリ上記實驗要領及實驗中止ノ經過等別紙第三ニ見ルガ如シ

本實驗ハ上記ノ如ク中止セラレタリト雖之ニ依ル教訓必ズシモ尠少ナラズ特ニ本兵器ノ機構及裝備法ニ關シ然リ(上記及別紙第四參照)越ヘテ大正十四年小演習ノ際一部艦(隊)ヲ指定シ戰術的用法ノ研究ヲ爲サシメタルガ之レ亦天候不良等ノ爲充分ナル研究ヲ行フ能ハズ寧ロ之ガ戰術的價值ヲ否議スルガ如キ情勢ヲ馴致セリ

大正十五年海軍々令部ニ於テハ從來ノ經過ニ就キ熟慮スル所アリ同年六月海軍々令部長ハ海軍大臣宛

左記ノ商議ヲ爲セリ

海令機密第九三號

大正十五年六月二日

海軍々令部長 鈴木貫太郎

海軍大臣 財部彪殿

一號機雷ニ關スル件

用兵上ノ要求ニ鑑ミ一號機雷ニ關シテハ今後左記ノ方針ニ依ルヲ適當ト認メ候條之ガ實行方御取計ヲ得度

記

一、艦船ニ於ケル裝備ニ關スル方針

- (イ) 裝備ヲ現有スル艦船及裝備方針ニテ建造中ナル艦船ニハ之ヲ存置シ敷設裝置ニハ將來必要ナル改善ヲ行フコト
- (ロ) 一等巡洋艦及第三十五號以後(第三十五號ハ改名シテ吹雪トナル)ノ一等驅逐艦(第二次補充計畫ノモノヲモ含ム)ニハ之ヲ變
備セザルコト

(ハ) 新ニ補充計畫ヲ立案スル場合ニハ更メテ考慮スルコト

二、機雷ニ關スル方針

- (イ) 一號機雷甲ハ之ヲ新造セザルコト
 - (ロ) 一號機雷乙ニ對シテハ必要ナル實驗ヲ續行シ機構上ノ改善ヲ完成スルコト
- 本機雷ノ製造ハ右ノ改善完了後更メテ考慮スルコト

三、取扱及訓練ニ對スル方針

- (イ) 軍機兵器取扱ヲ止メ極秘取扱トスルコト
- (ロ) 敷設訓練規則ヲ制定スルコト

(イ) 艦船ニテ衝擊セル場合安全ナル方法ニ依リテ之ヲ標示シ得ル擬製機雷ヲ供給シテ訓練ノ實施ニ便ナラシムルコト

右ニ對シ同年七月海軍大臣ハ成ルベク御來意ノ趣旨ニ副フガ如ク漸次可取計旨回答セリ

自後本兵器ノ訓練實驗ニ就テハ特記スベキ進展ヲ見ザリシガ昭和三年十二月廿六日海軍々令部次長ハ海軍次官宛左記要領ノ商議ヲ爲セリ

一號機雷ノ實驗ニ關シ大正十三年一月商議セシ處同年ハ天候其ノ他ノ關係上聯合艦隊ニ於テ右ニ關シ何等具體的研究ノ成果ヲ得ザリシ次第ニ有之候然ルニ本實驗ハ軍備計畫並ニ用兵上極メテ必要ナリト認メラレ候ニ付可成速カニ聯合艦隊ヲシテ一號機雷ノ兵術的使用法ヲ實驗セシメ得ル標訓練用兵器製作供給方御配慮相成度

右ニ基キ翌昭和四年二月ヲ以テ一號機雷(甲)特種浮標試製實驗ヲ見ルニ至レリ詳細ハ第一節第二目ニ記述セルガ如シ斯クテ本實驗ノ完了ニ依リ從來ノ如キ軍機上ノ顧慮掣肘ヲ輕減スルト共ニ實物使用ト大差無キ教練用一號機雷ヲ完成シタルヲ以テ昭和四年秋季ニ至リ之ヲ關係艦(隊)ニ供給シ訓練促進上ニ新軌軸ヲ出セリ乃チ海軍大臣ヨリ左記ノ實驗研究ニ關スル訓令アリ

昭和四年九月二十七日

海軍大臣

聯合艦隊司令長官宛

一號機雷(教練用)ノ實驗研究ニ關スル件訓令(官房機密) (第一一六七號)

首題ノ件左記ニ依リ實驗研究ノ上其ノ成績並ニ意見ヲ昭和五年末月迄ニ報告スベシ

記

一、實驗研究ノ目的

一號機雷(教練用)ヲ使用シ演習中竝ニ艦隊諸訓練ノ時機ニ於テ晝夜間ヲ通ジ一號機雷ノ兵術ノ使用機會ノ有無ヲ研究スルニ在リ

二、所要兵器

左記標準ニ依リ十月上旬迄ニ供給セシム

供給先		特種浮標數(一艦分)	記	事
第三戰隊	四八			
第二水雷戰隊旗艦	四〇		(イ) 附屬裝置ハ上記浮標ニ應ズル如ク適宜供給ス	
第一水雷戰隊	四〇		(ロ) 佐世保海軍々需部ヨリ供給ノ豫定	
第十五驅逐隊	一六			
第十六驅逐隊	八			
第二十七驅逐隊	一六			

尙同時ニ軍務局長ヨリ聯合艦隊參謀長宛申進セルモノ左ノ如シ

官房機密第一一六七號ヲ以テ首題ノ件訓令相成候處右ハ現用一號機雷ノ藥量機能ノ不足不備ハ暫ク之ヲ措キ主トシテ一號機雷使用機會ノ有無ヲ研究セントスルモノニシテ使用機會相當ニアリトセバ現用兵器ノ改善ヲ促進セントスル御内意ナルニツキ本旨ニ基キ出來得ル限り實戰的ニ之ガ使用機會ノ有無ヲ研究相成様致度

右ニ對シ聯合艦隊ニ於ケル實施狀況所見等左ノ如シ

一、研究方針

特種浮標ヲ使用シ昭和四年及五年度ニ於ケル演習ニ之ガ使用機會ノ有無ヲ研究スルト共ニ艦隊巡航中襲撃教練ト關聯シテ之ガ
使用法ヲ實驗研究ス

二、實施經過

- (一) 昭和四年小演習 第三戰隊第一水雷戰隊及鬼怒ニ特種浮標ヲ搭載實施ス(使用ノ機會ヲ得ズ)
- (二) 昭和五年大演習 同 右 (使用ノ機會ヲ得ズ)
- (三) 昭和五年巡航中

(一) 三月二十九日夜間 第三戰隊ハ魚雷襲撃後一號機雷ヲ敷設セシモ主力ノ前程ニ進出スルヲ得ズ何事効果無シ

(二) 四月三日夜間 第三戰隊各艦ハ屢々第一戰隊ノ前程ニ進出スルノ機會アリ一號機雷敷設ノ時機アリシモノト認ム

(四) 四月二十三日夜間 第三戰隊ハ使用ノ機會無シ第一水雷戰隊ノ二隊ハ發射ニ先ツテ一號機雷ヲ敷設セシモ運動極メテ難
澁ニシテ魚雷ヲ有スル限り機雷ノ使用ハ迂遠ニシテ有利ナラザルヲ實證セリ尙特種浮標ハ敷設直後
發火セルモノアリ

(三) 四月二十五日夜間 敷設容易ノ對勞ヨリ實施セシモ前同同様敷設運動極メテ難澁ニシテ前同同様ノ感ヲ深カラシメタリ
尙本回ハ第一戰隊ヲ敷設面ニ誘導シ拘提ノ實況ヲ見ントセシモ拘提シ得ズ

三、所見

(一) 昭和四年小演習及昭和五年大演習ニ於ケル實績ニ徴シ一號機雷使用ノ機會殆んど無ク特ニ昭和五年大演習ニ於テハ第一艦隊
各補助部隊ハ敵主力ニ對シ反復夜襲ヲ行ヒタルモノ一號機雷使用ノ機會ヲ得ズ之ヲ巡航中實施セル一號機雷敷設運動ノ難澁ナ
ルト綜合シ一號機雷ノ使用ハ魚雷ヲ全ク消耗セル後ノ窮手段ニ過ギザルモノニシテ輕快艦艇ニ對シ重量、容積、誘爆等ノ不
利ヲ忍ビ搭載スルハ適當ト認メ難シ

(二) 之ガ對策トシテ次ノ如ク方針ヲ變更スルヲ要ス

(三) 現用一號機雷ヲ廢止シ爆雷ト兼用ノモノヲ考案スルヲ可トス

理由 爆雷ノ搭載數ハ相當多數ニシテ之ヲ一號機雷兼用ノモノトスル時ハ其ノ使用機會相當ニ増大スベク重量容積、誘發等ニ對スル不利モ輕減シ得ベシ

(ウ) 現用一號機雷ヲ廢止シ其ノ重量容積ニ相當シ戰時搭載魚雷ヲ増額スルヲ可トス

理由 魚雷ノ使用機會ハ敵主力ノミナラス敵補助部隊ノ襲撃等其ノ使用機會大ニシテ特ニ優勢ナル敵警衛部隊、阻止部隊ヲ突破敵主力ニ近迫スルニハ必ズヤ先ヅ敵警衛隊ヲ撃破スルヲ要ス之ガ爲魚雷ノ搭載數ハ現規程ニテハ不足ニシテ一號機雷ノ敷設装置、格納庫、一號機雷ノ重量等ニ對スル戰時搭載魚雷數ヲ増額スルヲ有利トス

別紙第一

飛行機上ヨリスル一號機雷(甲)透視實驗

一、時日場所等

大正七年七月二十三日徳山灣外ニテ實施

口號第二號飛行機 操縦者 海軍中尉加藤成福 作業者 海軍中尉山口三郎

二、天候等

快晴、海上極メテ靜穩、實驗高度七〇〇米及四〇〇米

三、成果

- (イ) 一般ニ良ク視認シ得タリ機雷ハ黒味勝チ又ハ濃紺青色ヲ可トス
- (ロ) 浮標及索具モ成ルベク紺青ヲ可トス
- (ハ) 繫索ノ浮子ハ餘リニ密ナル爲發見ニ便ナリ

(二) 所在不知ノ者ニ在リテハ七〇〇米高度ニ於ケル機雷透視ハ困難ナリ

別紙第二

大正十年海軍教育本部提案一號機雷研究項目意見

一、現用隔時器ノ調整時間ニ對スル要求度

第一艦隊司令意見

(イ) 爆發調整時間ハ現行ノモノヨリモ長クスルヲ必要ト認ム

三等驅逐艦ノ八個一群連時代ハ可ナルモ目下ノ如ク四十八個搭載スルモノノ如キハ敷設中已ニ危險狀態ニ陥ルコトアリ繫索ヲ百米ニ延長スルニ於テ特ニ然リ

(ロ) 注水時間ハ五時間位有効ナルヲ要ス

戰術上ノ要求上戰勢ヲ有利ナラシムル晝間ノ使用法ニアリテハ一時間以上有効ナラシムル必要アリ五時間位有効ナルモノトシテ三十分間隔目盛ニテ可ナリト認ム

第二水雷戰隊司令官意見

現用隔時器ニ於ケル爆發用調整時間一分乃至五分ハ適當ナルモ注水用調整時間五分乃至一時間ハ晝間戰術上ノ利用等ヲ考フレバ尙延長スル必要アリ二時間位トセバ諸種ノ狀況ニ應ジ支障無シト認ム

二、編隊敷設ニ於ケル通信法

第二水雷戰隊司令官

編隊敷設ニ於ケル信號通信事項ハ一、敷設開始令二、最後ヨリ六個目ヲ投下セシ報告三、全部投下セシ報告四、敷設中止令等

ニシテ信號通信方法トシテハ晝夜ニ分チ旗旒、手旗、輕便燈、無電、粒燈等ヲ單用又ハ複用シツツアリ未ダ理想的ナラズ目下無線電話ハ隊内通信用トシテハ發光信號ヨリモ通達速ク未ダ之レニノミ信賴シ難キモ其ノ使用ニ習熟セバ無電ニ代ルコトヲ得ベク一層便ナルベシ

三、一號機雷使用ニ關シ現驅逐隊定員ニ對スル要望

第二水雷戰隊司令官

(イ) 裝備數ノモノヲ母艦等ヨリ受取り搭載敷設スル場合又ハ現定數(三十二個)ノ半數ヲ裝備スル程度ナレバ現定員ニテ充分ナリ

(ロ) 裝備數二十四個以上トナレバ水雷員ノ技術(約五箇月訓練ノ結果一個約二時間)ニテ日數二日(一日十時間作業)ト限定セム

カ五名以上ノ増員ヲ必要トスベシ而シテ増加員ノ割合ハ左ノ如クナルベシ

高水(電機)一、普水二、無章二

四、其ノ他ノ研究事項

實施ノ機會無ク意見無シ

別紙第三

第一、聯合艦隊一號機雷實驗要領(大正十三年八月三十日)(摘要)

本實驗ハ一號機雷ノ實戰的用法及價值ヲ研究スルチ主目的トシ聯合艦隊第八回基本演習中之ヲ施行ス

一、編制

區分	部	隊	指揮官	兵力假裝
甲軍	第一艦隊 (潛水戰隊、機雷隊、特務隊) (夕張、四號驅缺)		聯合艦隊司令長官	略
乙軍	第二艦隊 (長鯨、 潛水隊缺)		第二艦隊司令長官	

二、想定

甲軍ハ九州東岸占據ノ目的ヲ以テ西航シ乙軍ハ甲軍ガ其ノ根據地ニ入ルニ先チ之ヲ途上ニ遭ヘ先ヅ輕快部隊ノ夜戰ヲ以テ之ニ一撃ヲ加ヘタル後翌朝ヲ以テ決戰セムトス

三、主要研究項目

- (一) 一號機雷ノ實戰的用法及價值
 - (i) 晝夜間ニ於ケル一號機雷ノ戰術的價值
 - (ii) 魚雷機雷併用戰法及其ノ實施
 - (iii) 一號機雷ノ機構的及兵術的價值
 - (二) 敵ノ一號機雷ヲ豫期スル主力部隊ノ戰法
 - (三) 洋中ニ於ケル遊撃戰及艦隊ノ決戰
- 三、九月十四日午後二時演習ヲ開始ス
- 各驅逐隊ノ一號機雷使用數左ノ通定ム
- (一) 第三戰隊(夕張缺) 各四十八個
 - (二) 第二水雷戰隊ノ二個驅逐隊 各十六個

四、制令
 (三) 第一水雷戰隊ノ二個驅逐艦 各八個

(一) 演習開始時刻 九月十五日午後二時

(二) 最大速力

第一戰隊 十八節 第四戰隊 二十節 巡洋艦 二十八節 驅逐艦 二十八節

五、機雷敷設ニ關スル事項

(一) 機雷ノ使用ニ關シテハ左記ニ依ル

(1) 使用機雷數

第三戰隊(夕張)第五戰隊各艦 四十八個

一等驅逐艦 十五個

二等驅逐艦 八個

(2) 前號ノ各艦ハ其ノ半數ヲ夜間ニ他ノ半數ヲ晝間ニ使用スルモノトス其ノ他ノ時期ニ於テハ擬施ニ止ム

(3) 機雷ノ準備ハ左記ノ外機雷放範草案及同操式草案ニ依ル

(4) 裝備

夜間用		晝間用	
(一) 擬製炸藥ヲ使用ス	(一) 同	(一) 同上	(一) 同
(二) 導火藥ノ代リニ演習炸藥ヲ裝填ス	(二) 信管ノミ裝着シ演習炸藥及導火藥ヲ使用セズ	(二) 信管ノミ裝着シ演習炸藥及導火藥ヲ使用セズ	(二) 信管ノミ裝着シ演習炸藥及導火藥ヲ使用セズ
(三) 機雷罐底蓋室ニ特種發光器四個宛ヲ裝填ス	(三) 特種發光器ヲ使用セズ	(三) 特種發光器ヲ使用セズ	(三) 特種發光器ヲ使用セズ

(四) 注水炸藥 (注水信管)ヲ裝填ス	(四) 注水炸藥及同信管ヲ裝着セス
	(五) 機雷總ニハ其ノ頭部ニ艦名及一連セル機雷番號ヲ記入ス

(四) 測定諸元

項目	測定量	
	夜間用	晝間用
爆發時間	一分	一分乃至五分
注水時間	一時間	同上
注水栓溶劑ノ種類及量	三盆白糖二耗	同上
啓閉器調整量	六〇〇瓦	同上
繫器溶解劑ノ種類及量	ザラメ糖四分	同上

(イ) 敷設裝置

滑走臺ヲ使用シ浮泛板ヲ使用セス

(ロ) 夜間ノ敷設機雷ハ之ヲ採收セス晝間ノ敷設機雷ハ演習終結後敷設隊(艦)ニテ之ガ採收ニ任ジ其ノ他ノ隊(艦)ハ適宜之ヲ援助スルモノトス

(四) 見張等ノ件(略)

六、其ノ他(委員報告等)略ス

第二、演習經過及教訓

本演習ハ九月十五日午後二時開始ヲ令セラレ演習部隊ハ夫々配備ニ就キシガ天候險惡ノ爲一號機雷實驗ハ實施ニ至ラズ午後六時演習中止次テ演習ヲ止ム狀況等左ノ如シ

一、當時ノ天候等

天候 雨、 視界 時ニ七八千米ニ及ビシコトアルモ多クハ四千米ヲ出デズ

風向風力 東六一七

海上ノ模様 荒 波ノ速サ 十三節餘

尚針路ト風向トノ交角ニ點内外ニシテ向波ノ時ハ一等驅逐艦ニテ十四節ヲ限度トセリ、追波ノ時巡洋艦以下ニ在リテハ艦速十二節ニテ常ニ後甲板ヲ洗ハル

二、船體機裝ノ損害(艦動搖最大一等驅逐艦左右三〇度)

驅逐艦ニ於テ左記ノ損害アリ

艦橋窓硝子破損、波除ケ風曲、艏砲撃止鏈切斷、短艇破損

三、機雷及敷設裝置ノ損傷

(一) 機雷

各巡洋艦驅逐艦ニ通ジ左記ノ若干ヲ生セリ

機雷注水栓砂糖溶解、繫器ゴム環ノ外レタルモノ、繫器ノ分離セントスルモノ、繫器ノ砂糖溶ケタルモノ、繫索ノ擱ミタルモノ

(二) 敷設裝置

各巡洋艦驅逐艦ヲ通ジ左記ノ若干ヲ生セリ

後扉彎曲、側幕支柱屈曲、滑走齏破壞、滑走齏共ニ軌道ヨリ外レタルモノ、側扉彎曲、側幕大破損、後扉流失、軌道風曲、追波ニテ機雷十二個(右舷全部)流失

(註)今回ノ如ク常ニ波浪ニ洗ハルル状態ニテハ敷設準備ノ爲人員ヲ機雷搭載位置ニ配スルハ危険ナリ
四、前記損失ノ状況ニ鑑ミ將來改善ヲ要スベキ事項ニ就キ實施部隊意見

(一) 現在ノ敷設装置ノ支柱敷チ増加シ側板チ頑強ナラシムベシ(五十鈴、多摩、第一驅逐隊等)

(二) 輕巡敷設装置ノ側幕ニ代フルニ板チ以テスルチ可トス(長良、川内)

(三) 浸水ニヨル砂糖溶解防止装置ノ完全ナルヲ要ス(各艦)

(四) 敷設装置ヲ夕張型ノ「トシネル」式トナスヲ要ス(各驅逐隊)

(五) 後扉チ艦橋ヨリ水壓ニテ開キ得ル如クスルチ可トス(多摩、第十四驅逐隊)